

令和6年度 特色ある道德教育推進校

県立小金高等学校

研究主題

デジタル・シティズンシップの理解から実践へ

— デジタル機器を活かし、積極的に社会へ参画する心を養う —

授業の流れ

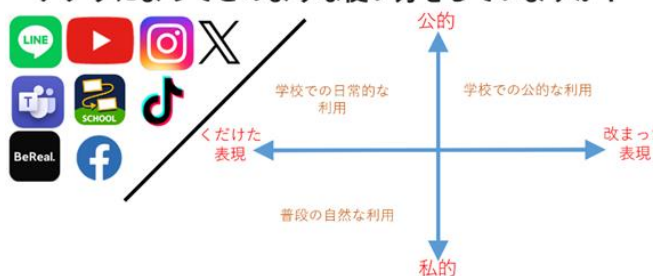
今、インターネットが社会インフラとなり、多くの人がSNSを使っている。デジタル・シティズンシップ教育とは、その現実を前提に、デジタル市民としてどう生きていくべきかを考えさせ、責任あるICTの使い方と社会への貢献の仕方を学び、ICTのよき使い手になると同時に、よき社会の担い手になることを目指す教育である。「あれをしてはダメだ」中心の情報モラル教育と違うことに留意する必要がある。今回は、デジタル・シティズンシップ教育の領域の中でも、「ニュース・メディアリテラシー」に着目し、年4回の授業を行った。

1回目の授業（デジタルシティズンシップとは）

- ①情報モラルとの違いを意識して、デジタル・シティズンシップを説明。
- ②ネット上のコミュニケーションについて考える、パブリックとプライベートの境界を互いに確かめ合う。
- ③ネットやSNSは現実でのコミュニケーションの延長で、普段のコミュニケーションが重要だということに気付かせる。相手を思いやる、主張をしっかりと伝えることが日頃から重要である。デジタル社会では「積極的に関与する」姿勢を身につけることも大切で、そのためにデジタル・シティズンシップの考え方が必要である。ただし、「積極的に使う」ことは大切だが、トラブルにならないように注意することも必要である。

ツールで考える

アプリによってどのような使い方をしていますか？



自分の影響を考える

次の行為はどのような影響があるだろうか



2回目の授業（判断の基準とは）

- ①人によって、物事を判断するときに、違いがでることを体感する。
- ②無意識に偏った見方や考え方をすることがある。これをバイアスという。「認識や思考に偏り、ゆがみがあるとされる状態のこと」を認知バイアスという。認知バイアスは自分自身の思い込みや前例などの要因から起こることが多く、その結果として、合理的な判断ができなくなってしまうので注意する必要がある。例えば、ネットニュースや動画サイトでは自分の興味のある記事・動画、同じ考え方の記事・動画が次々に紹介される。よりバイアスが強まる可能性があることに留意する。
- ③なぜ人はフェイクニュースに引っかかるか話し合う。原因の一つは、確証バイアスがかかっているからである。確証バイアスとは「自分が立てた仮説が間違っていることを証明する

情報よりも、その仮説を確認してくれる情報に着目してしまう、または不利な情報を無視してしまう思考、心理現象」のことである。

④日常生活の確認バイアスの例を出し合う。例として、血液型と性格、投資済の企業の情報収集などがある。

⑤バイアスの対処法を話し合う。対処法例は、「自分のバイアスについて認知する」、「批判的に物事を見る」、「決めつけや予測で動かない」、「人の意見に耳を傾ける」、「経験則を当てにしすぎない」、「データや数字を根拠にする」などである。

図)

(右図は人によって見え方が違う例)



3 回目の授業 (To Share or Not to Share-フェイクニュースを見分ける-)

①「企業が採用時にSNSをチェックする」など、例をあげながら、情報を発信する側の信用度が評価される場合もあることを説明。

②現実のSNSに似せたシミュレーター「To share or not to share」を使用し、投稿（ニュース）のシェアを通して、できるだけ多くの「フォロワー」を獲得することを目指す。SNSで流れてくる大量の情報の中からどの投稿を共有するのか、しないのかの判断によってフォロワー数が増える。フェイクニュースをシェアすると信頼を失い、炎上する可能性がある。

③世間で話題になったフェイクニュースを紹介。

④班で、投稿のシェアの理由など、学んだことを話し合う。

4 回目の授業 (デジタルシティズンシップ宣言)

①アメリカ独立宣言などの例を用いて、「宣言」の説明。

②「ニュース・メディアリテラシー」についての宣言を個人、班で考える。

③後日、②の案をもとにICT委員会がまとめ、生徒総会で小金高校版デジタルシティズンシップ宣言をする。

(小金高校版デジタルシティズンシップ宣言については学校ホームページ参照。)

主な成果と課題

○アンケートではネットを活用したコミュニケーションを通じて、社会参画したいという意識が上昇した。

○一人一台タブレットの環境を最大限生かすためにも、これらの知識を生徒が得ることは非常に有益であった。

●デジタルシティズンシップ教育には「ニュース・メディアリテラシー」の他に「対人関係とコミュニケーション」など、5つの領域があり、授業4時間ではデジタルシティズンシップのすべてを教えることはできない。

授業実践事例

1 学習指導案

高等学校 1 年「道德」を学ぶ時間指導案

令和 6 年 9 月 2 6 日（木）

（1）主題名

デジタルシティズンシップとは

（2）ねらいと教材

- ①デジタルシティズンシップについて概要を知る。
 - ②インターネット上でのパブリックとプライベートの境界を互いに確かめ、インターネット上での行動を可視化する。
 - ③今後のワークショップに向け、デジタルでの自分自身の行動について考える。
- 教材は学校オリジナル。

3 主題設定の理由

（1）ねらいや指導内容についての教師の捉え方

ICTの急速な進化が進む現代において、ICTの利活用について多様な考え方を学び、有効に使用していく方法を主体的に考えることで、これからの社会をよりよく生きていく力を養う。

（2）生徒のこれまでの学習状況や実態と教師の願い

ICT機器は日常的に使用しており、特に困っている様子はない。情報モラル教育を受け、ネット上で行ってはいけないことを理解しているが、情報を発信することに臆病になっている一面もある。デジタルシティズンシップを学び、ICTを活用して社会に積極的に関与する能力を育てたい。

（3）使用する教材の特質やそれを生かす具体的な活用方法

PowerPointで授業用スライドを作成し、各クラス同じスライドを用いて授業を行った。担任の授業準備の負担軽減につながる。

4 展開

（5）他の教育活動との関連

時間	内容	指導上の注意
導入1 1分	4人班で行うため事前に班の形にしておく。 担任から、今日の内容を紹介する。	簡単に短く。 道德の授業として全4回実施すること。 班で活動するので、積極的に取り組むこと。
導入2 21分	1 今 社会から求められるもの 2 デジタルシティズンシップとは	・資料は Teams のファイルにて共有。 ・パワーポイントを使用して説明する。
展開2 18分	3 インターネット上でのコミュニケーション 無意識に行っていることを可視化(2分) ここからロイロノートを使用。 個人ワーク → ①関係で考える(3分) ルールを書き出す。 → ②ツールで考える(3分)	この後のワークの内容を説明する 普段自分が使用している SNS やインターネットなどを視覚的にまとめる ②は普段の Teams の使い方にも影響す

	アプリによって、公的⇔私的、くだけた表現⇔あらたまった表現の図の中でプロットする。 (1)グランドルールの説明 班ワークのルールを必ず説明してください。 (2)班の役割決め 司会、記、発表、まとめ記入送信 個人ワークの結果を班で共有し、アプリを使用するときの共通点を探す。(5分) →③自分の影響を考える(4分) 影響が大きい⇔小さい、責任が大きい⇔小さいの図の中でプロットする。 班で共有する。	るので、パブリックの感覚をしっかりと伝える。 ワークシートで作業を行い、班でお互いの考えを見せ合う。 パワーポイントを使用して説明する ③リアクションボタンのような責任が小さく、影響が小さいものに偏っているのではいか？と意識づけたい。 使わないと言う消極的な姿勢ではなく、積極的に使用するべきであることを示唆する。
まとめ 3分 1分	今日の内容をまとめる。 感じたこと思ったことを班で話し合う。 デジタルシティズンシップを元になっているが、あくまでも日頃の過ごし方に還元されるように、ご指導ください。 デジタルシティズンシップのチームの中のホワイトボード機能を活用します。 班ごとにデジタル付箋を使ってホワイトボードにコメントを残す。 まとめた内容を Teams で共有する。 道徳専用のチームを作成したので参加をさせる。	インターネットや SNS はリアルの延長で、普段のコミュニケーションが重要だということに気付かせる。相手を思いやる、主張をしっかりと伝えることが日頃から重要である。 「積極的に関与する」姿勢を身につけることが大切である。そのためにデジタルシティズンシップの考え方が大切である。ただし「積極的に使う」ことは大切だが、トラブルや技術的に危険なことにならないようにも注意することも大切であり、今後だんだんと身につけていくことを伝える。

2 授業の様子

(1) 授業スライドダウンロードURL

<https://cms1.chiba-c.ed.jp/kogane-h/f475194aa60caeea62c2d584df46bfc7>



(2) 生徒の様子

班で意見を共有することによって、ネット上でのコミュニケーションについての共通点、相違点を確認することができた。ネット上でのコミュニケーションが可視化され、ネット上の行動はリアルの延長であり、普段のコミュニケーションが大切だということに自ら気付いた生徒もいた。

ロイロノートでの作業

